



Profile

- 東京大学文学部第二類西洋史学専修課程 卒業
- 東京大学大学院理学系研究科地理学専攻修士課程 修了
- 東京大学大学院総合文化研究科
広域科学専攻博士課程 単位取得退学
- 神戸商科大学商経学部経済学科 助手→講師→助教授
- 兵庫県立大学経済学部応用経済学科 助教授
- 兵庫県立大学経済経営研究所 助教授
- 兵庫県立大学経済学部応用経済学科 准教授
- 兵庫県立大学政策科学研究所 准教授

人口減少時代にまちづくりの課題やニーズが変化する中でかつての大型ニュータウンの活性化について研究を進めており、その新しい試みは全国から注目されています。

Q1. 神戸市と明石市にまたがる明舞団地の再生プロジェクトを研究されていますが、どのような研究でしょうか。

明舞団地は高度成長期の昭和39年にまち開きし、ピーク時には4万人近い住民がいました。まちはその時の最適な形で作られましたが、思ったほど住民の入れ替わりがないまま50年が経ちましたので、住民の高齢化や、車の普及により、住民の生活と今の団地の形にどのようなずれが生じているのかを明らかにしようとしています。例えば、買い物や病院は団地の中ではなく外の色々な場所に行っているとか、お付き合いの広がりなどを調査しています。高齢化の問題は、日本全体でこれからどんどん進んでいくと言われている問題で、明舞団地はその動きを先取りしているところがありますので、これから地域が抱える問題を身近に勉強することができる良いフィールドであると考えています。

Q2. 実際の調査・研究はどのようにおこなわれているのでしょうか。

2009年に商店街の空き店舗を一区画お借りして「明舞まちなかラボ」ができました。ゼミをしたり学生が活動する拠点にしたり、様々な調査・研究をしています。最初の頃は、色々なイベントを学生とお手伝いをすることから始まり、今では学生側が意見をだして、企画をするというようなこともあります。まちを盛り上げていくような役割を少しずつ担えるようになってきたのかなと思っています。団地は古くなったら建て替えるというのが今までのやり方だったと思いますが、これからは色々な人や機能が入り、私達大学も入って、お互いつながりあってまちをつくっていく、そういう試みをしているという点でこの明舞団地は注目されており、全国から視察が来ています。

Q3. この新しいまちづくり再生プロジェクトに、先生の女性研究者としての視点はどのように活かされていますか。先生が提案される明舞団地の将来像はどのような姿でしょうか。

高度成長期のまちは猛烈サラリーマンのためのまちでしたが、これからは色々な生き方が求められる時代ですので、女性の視点もすごく重要だと思っています。私自身、子育てをしていると思うのですが、仲間が必要です。お母さんの仲間がいるとか、子どもが友達にすぐ会えるとか、近所で遊べるとか、そういうことはすごく大切だと思っています。子育ての人が多い「まち」、学生街のような「まち」、高齢者が静かに穏やかに暮らしている「まち」、そういった特徴のある地域がお互いに交流することによって理想の明舞団地の姿に近づいていくと思います。つまり「まち」には多様性が必要だと思っています。

Q4. 研究を続けていきたいという女子学生や、先生のように女性研究者として頑張っていきたいという後輩の皆さんに、アドバイスやメッセージをお願いします。

私は研究者でもあり、3人の子どもの母親でもありますので、その苦労も喜びもできるだけ見せたいと思っています。ですから、学生が企画した地域のイベントにも時々子どもを連れて参加し、研究者でもあり母親でもある姿が普通の姿だということを学生には見てもらっています。もちろん、すごく大変だと思う時もありますが、母親モードと研究者モードを行ったり来たりするその変化には、充実感があります。

Message

研究者でもあり母親でもある。
それはある意味普通の姿。

